

幼児の描画発達における一考察

—幼児の描画発達とメディア接触量との関連性—

倉原弘子

A Study of the Stages of Development of Drawing Skills in Infants —The Relation between the Stages of Development of Drawing Skills and Time Spent Watching Media by the Infant—

Hiroko Kurahara

I はじめに

幼児の造形表現の目的は、遊びを通して学び、自らを発達させ、人間形成をすることにある。人間は生まれてから、見るものすべてに興味を持ち、視覚、触覚、聴覚、嗅覚、味覚といった五感を全て用い、感じ、手を動かし、道具を握り、それらを用いて遊びを通しながら、自らを発達させていく。そして、それと連動して、幼児は自らの造形の能力も発達させていくのである。

しかし、郷間英世、大谷多加志、大久保純一郎が行った研究において、「現代の子どもの発達は20年前よりも遅延しており、遅れの内容では、特に「描画」において顕著である」という結果が出ており、幼児の描画発達の遅れが懸念されている。拙稿「幼児の描画発達における一考察 —幼児の描画発達と睡眠・覚醒リズムとの関連性—」において、幼児の描画発達と睡眠・覚醒リズムには関連性があり、睡眠・覚醒リズムの乱れが幼児の描画発達の遅れと関係している可能性があることは、すでに述べた。現代において、女性の社会進出、家族の多様化等による子どもの生活リズムの変化が幼児の発達に何らかの影響を与えている可能性があり、幼児の睡眠・覚醒リズムのみならず、他にも生活習慣と描画発達の遅れとの関連性が考えられる。そこで、今回は、幼児の描画の発達段階、その特性を再確認すると共に、幼児のメディア接触時間が描画発達に及ぼす影響について調べてみたい。それが本研究報告の目的である。

II 幼児の描画発達

さて、本章において、幼児の描画発達段階、発達の特徴について見ていくこととしよう。この点に於いては、すでに拙稿「幼児の描画発達における一考察 —幼児の描画発達と睡眠・覚醒リズムとの関連性—」で詳しく述べているため、本研究報告では、端的にまとめるのみと

する。

1 幼児の描画発達段階

1 歳

1歳前後では、マーカーを手にして画用紙の上に点・線遊びを始める。1歳半前後では、肩や肘が自由に動かせるようになるにつれ、左右の水平的な折れ線に上下の折れ線が加わり、やがて渦巻き形の円運動となる。

2 歳

2歳前後では、円形の線あそびの中に大小の終結した線の円も描くようになる。描いた円に命名し、意味づけをする。2歳半前後では、徐々に終結した円形が描けるようになる。空間への認識もかなり発達し、大小の円をかき並べたり、大きい円の中に小さな円を描いたりする。

3 歳

3歳前後では、きれいな円形を描けるようになる。短い水平線や垂直線も描けるようになり、3歳を過ぎると顔らしい人物表現をし、「頭足人」と呼ばれる人物表現も見られる。3歳半前後では、簡単な形態を表現の意図を持って描くようになり、生活の中で知ったものを素直に描く。

4 歳

4歳前後では、空間や形態への認識が一層深まり、デフォルメされた表現も見られ、直観的で自分なりの捉え方をする。人物表現としては胴体を描くようになる。4歳半前後では、ものごとを分類する能力が発達するが、空間への認識が不十分で、配列には関連性があまりなく、対象物に関しては、感情的・興味的であり、自分の知っていることを強調して表現する。アニミズムの傾向として、太陽や花などに目や口を描く。

5 歳

5歳前後では、対象に近い形、気分合った色をある程度考えて使うようになる。対象の特徴や装飾的なもの

を描き加えたり、人物表現では、手足を2本線で表現する。5歳半前後では、ものとの相互の関係が把握できるようになり、説明要素の多い表現となる。空間認識の発達により、画用紙の下部に土や草を描き、画用紙の上部には雲や太陽を描く。人物表現においては、目・鼻・指など詳しく描くようになる。

6歳前後

画用紙の下部に一本の線（基底線）が現れ、基底線上に自分の思いを描く。積み上げ遠近から透視遠近へと構図が変化する子どももいる。人物の動きでは対象物にとどくまで手を長く描くなど、合理性も表現しようとする。

2 発達段階の特性

幼児の発達には、遺伝的要素や環境要因による経験の相違等によって、個人差が生じる。幼児の発達の特性について、拙稿「幼児の描画発達における一考察 - 幼児の描画発達と睡眠・覚醒リズムとの関連性 -」で詳しく述べているため、ここで発達段階の特性について、その項目のみ簡単に紹介する。

幼児の発達段階には、「1. 一定の順序性、2. 発達の連続的過程、3. 発達の分化と統合、4. 発達の相関性、5. 発達の個人差、6. 素質と環境の相互作用、7. 心理的な退行の可能性」といった特性がある。幼児の発達段階において、一般的に、一定の順序で連続的に発達していくことが多く、分化と統合を継続しながら、造形活動と関連していく。つまり、人間の発達とは、未分化で全体的であった身体の機能や構造が、各部に分かれ、それらが別々の働きをしたり、相互に関連、調整され、高度な動作ができるようになるのである。その身体の機能の発達が造形活動にも多大な影響を与える。また、発達には「身体的発達・言語的発達・知的発達・情緒の発達・社会性の発達」などと相互に関連するといった相関性があり、環境条件（物的環境・人的環境）が悪ければ、素晴らしい素質も伸ばすことが出来ないと云った素質と環境の相互作用もある。さらに、精神の発達のつまずき（愛情不足、情緒不安など）により、固着した描画の発達段階に退行することも考えられる。

III 幼児の描画発達と生活習慣

本章より、幼児の描画発達と生活習慣との関連性における観点から、幼児の描画発達とメディア接触時間との関連性の研究を紹介していこう。

1 幼児の描画発達とメディア接触時間の関連性

1-1 5歳児に関する研究

川越奈津子、池田友美、武藤葉子、郷間英世は「5歳保育園児の生活習慣と描画能力」において、公立保育園3園に在籍する5歳児134名の保護者を対象に、平成17年5月、生活習慣についての質問用紙を配布し、家族構成、保育時間、アトピーなどの健康状況、食事、睡眠、テレビなどのメディアとの接触時間等の調査を行い、113名（回答率84.3%）から回答を得ている。また同年8月に、上記対象児に個別に人物描画及び、三角形模写を実施し、人物画はグッドイナフ人物画知能検査(DAM)ハンドブック、三角形模写は新版K式発達検査2001実施手引書に従って行っている。川越らの分析対象は生活習慣調査の回収と人物画、三角形模写が実施できた男児48名、女児53名の計101名であり、平均月齢は男児69.9ヶ月、女児69.6ヶ月、全体69.8ヶ月(64~76ヶ月)である。分析はメディア接触時間（テレビ・ビデオ+テレビゲーム）を2時間未満、2~4時間、4時間以上に分け、それぞれのDAM-IQの平均と三角形の通過率（課題に合格した割合）を比較し、検討している。

その結果としては、食事に関しては、約9割の子どもは毎日朝食をとり、夕食の時間も一定であり、好き嫌いがある子どもは約7割いたが、特に問題はなかったとしている。保育時間、起床時刻・就寝時刻・平均睡眠時間については、大きな男女差はなく、保育園児の保護者の多くが就労しているため、保育時間、睡眠時間などのばらつきも見られず、食事や睡眠などと描画の関連性は見られなかったが、DAM-IQ、三角形模写通過率ともに、メディアとの接触時間が短いほど高く、長くなるほど低くなる傾向にあると結論付けている。つまり、長時間接触している子どもほど、描画能力が低いことが判明したと述べている。

上述したように、川越らの調査結果としては、生活習慣と描画の関連性は、メディア接触時間に関してのみ関連性があったと考えられる。そして、以下のような考察

表1 メディア接触時間と描画

	2時間未満(n=31)	2~4時間(n=47)	4時間以上(n=23)
DAM-IQ(M±SD)	98.29±13.23	90.17±12.96	84.26±6.71
三角形模写の通過人数(%)	25(80.6)	26(56.5)	8(34.8)

表2 描画内容の平均評定値(SD)と平均 DAM 得点(SD)

	男性像顔のみ	男性像顔+胴	女性像顔のみ	女性像顔+胴	男性像 DAM	女性像 DAM
男児	2.29 (0.82) N=220	2.47 (0.68) N=225	2.51 (0.70) N=219	2.50 (0.67) N=216	6.50 (2.86) N=465	6.89 (2.56) N=420
女児	2.72 (0.56) N=111	3.02 (0.61) N=300	2.89 (0.62) N=119	3.14 (0.56) N=297	8.51 (2.90) N=420	8.64 (2.98) N=416
統計値	$P(1,333)=24.51,$ $p<.01$	$P(1,530)=98.85,$ $p<.01$	$P(1,339)=24.34,$ $p<.01$	$P(1,518)=138.91,$ $p<.01$	$P(1,883)=107.67,$ $p<.01$	$P(1,834)=83.38,$ $p<.01$

出典：子安，郷式（2008）p.1105

を加え、まとめている。

【考察】

本研究では DAM-IQ と三角形模写通過率ともにメディア接触時間の長短との関連がみられた。保育園児の場合、生活習慣の調査結果から平均保育時間と就寝時間を見ると、帰宅してからの時間はそれほど長くない。メディア接触時間が4時間以上に及ぶことは、食事や入浴以外家族とかかわることが少なく、ほとんど一人でテレビ・ビデオやテレビゲームと過ごしていると考えられる。長時間接触のため幼児の成長に重要な人との相互的なかわりや体を使った戸外遊び、体験を伴う遊びが少なくなっており、それらが描画発達にも影響を及ぼしていると思われる。⁴

上述したように、この研究結果から見れば、メディア接触時間が長い幼児ほど描画発達に遅延が見られると考えられる。

1-2 4歳児に関する研究

子安増生，郷式徹は、「4歳児の男女人物画の発達とメディアの影響」において、NHK「子どもに良い放送」プロジェクトのフォローアップ調査（第5回データ）に基づき、4歳～5歳児の描画の発達とテレビ・ビデオ・ゲームの各メディアの接触量との関連性について分析している。子安らは、第4回調査では、人物画を「顔のみ」、「顔+胴」に分け分析を行っている。その評定得点とグッドイナフ人物画検査(DAM)の採点基準による得点のすべてにおいて性別の主効果が有意であり、女児の方が男児よりも評定値/DAM得点が高かったという結果を受け、その理由として、描画の性別対応（同性の人物画を描くこと）があるとするならば、女児は女性像を描き、女性の装飾類の多さが特典を向上させた可能性があると考え、その仮説の確認のために、第5回調査では男女1人ずつの人物画を描いてもらうことにしている。

子安らは、NHK「子どもに良い放送」プロジェクトに参加・協力する、平成14年2月～7月に生まれた子どもの保護者に対して、2007年1月、自宅への郵送調査を実施しており、対象児は、幼児885人（男児465人、女児420人）、平均年齢4歳8ヶ月（範囲4歳5ヶ月～5歳0

ヶ月）であった。調査内容としては、調査用封筒にA4判画用紙（横置き）2枚と油性ペンを同封して郵送し、「おとうさん（おかあさん）でも、先生でも、おともだちでも、だれでもいいので、男の人（女の人）の絵を描いてください。」という保護者の指示により、子ども自身に油性ペンで人物画2枚を描いてもらうというものである。

その結果として、子安らは、人物画について、描画内容による評定とグッドイナフ人物画検査(DAM)の採点基準による得点化を行っており、描画内容による評定に関しては、男性画では「顔のみ」335人、「顔+胴」533人、女性画では「顔のみ」341人、「顔+胴」521人の4群に大別し、DAM得点は男性像と女性像に分けて算出している。表2のように、この6つの指標のすべてにおいて性別の主効果が有意（1%水準）であり、女児の方が男児よりも評定値/DAM得点が高かったと述べている。

そして、以下のように、考察を述べている。

【考察】

女児の方が男児よりも描画内容得点が高いことが示されたが、その理由として、男児は男性像を描き女児は女性像を描くという性別対応と、女性像の方が衣服や髪飾り等の装飾品を描く可能性が高くなるからという仮説は、男性像と女性像の両方を描かせる今回の調査の結果から、排除されることが示された。性差の原因については、さらに今後の検討を要する。

これまでの調査では、ビデオとの接触およびビデオとの接触を含むメディア接触量と描画内容との関連が見られ、接触量が多い子どもの方が少ない子どもよりも描画内容の評定得点が低かった。ただし、重回帰分析の説明率が低く、メディアが直接描画の質に影響するとは言い切れない。

上述したように、子安らの研究においては、幼児のメディア接触量にのみ着目すれば、「メディアが直接幼児（今回は4歳児）の描画の質に影響するとは言い切れない」と結論づけられる。しかし、その確率は低くとも、川越らの研究結果にもあるように、過剰なメディア接触

量が幼児の描画能力に全く影響はないとも言い切れないのではないだろうか。

2 メディア接触時間が幼児に及ぼす影響

メディア接触時間が長ければ長いほど、手先を使った遊びの時間や家族、保護者との対話、接触時間も短くなる。それは、幼児の描画発達に影響を及ぼす可能性がある他に、幼児のコミュニケーション能力にも多大な影響を及ぼすと考えられている。片岡直樹は、コミュニケーションの苦手な子どもたちの7割を「親やまわりの大人からの呼びかけに無表情、反応できない赤ちゃん＝サイレントベビー」が占めており、残りの3割は、1歳半から2歳くらいになって親とのコミュニケーションがとれなくなる子どもであると述べ、そのような子ども達の共通点として、テレビ、ビデオの存在があると指摘している。生まれてすぐにテレビがついている環境で育ち、生後半年から1年の間位からテレビ漬けになっており、「母親など生身の人間との関わりが非常に乏しい」ことが原因と考えられている。さらに、片岡はテレビを消して親子が対面で遊ぶようにすると、子どもの年齢が小さいほど劇的に改善し、1歳くらいであれば、1ヶ月テレビをやめれば、見違えるように表情が豊かになった事例もあると言う。片岡は、「子どもの未来を奪う過度のテレビ、ビデオ」、「テレビを観たら3～5倍の外遊び等を」とも述べており、幼児の過度なメディア接触は、結果的には幼児自身の未来を奪うことになりかねないと警告している。また、どうしてもテレビを見せるのであれば、その3～5倍の外遊びというように、多くの遊びの時間を必ず設け、親など周囲の人々と関わることでコミュニケーション能力を育成したいものである。

また、無藤隆は、カナダのウィリアムズの研究（カナダの田舎町（ノーテル町）でテレビが入っていなかった所にテレビが入って二年経ち、子どもや大人の生活や行動がどう変わったかを調べたもの）の結果について、子どもの造形活動に関しては、「子どもの創造性（物のいろいろな使用法を考え出す課題で測る）が下がった」と述べている。無藤は、これは、テレビ視聴が他の活動に置き変わるからであり、戸外でする活動や集中力を要する活動は一緒には出来ないために、創造性などに問題が出てくると述べている。このように、テレビ、メディア接触量が、人々の時間の使い方に変化を与え、結果的にデメリットを与える事は、当然のことだろう。

IV まとめ

1 メディア接触量が幼児の描画発達に及ぼす影響

これまで述べてきたように、幼児の過度なメディア接触は、描画発達を遅らせる可能性があり、コミュニケーション能力、子どもの創造性も低下する可能性があることが分かった。また、子どもテレビの会(FCT)が、「幼児が自分の行きたいところへ移動できるようになると、まずテレビに吸い寄せられていく」と述べているように、幼児にとってテレビとは興味深い存在である。NHK放送世論調査所が昭和55年3月に首都圏の0歳から6歳までの幼児を対象にした世論調査の報告『幼児の生活とテレビ』によれば、生後4か月～7か月ですでに3分の2の幼児はテレビに関心をもつようになり、1歳半になると、「内容の理解」もできるようになり、「習慣的視聴」をはじめると述べている。これが昭和55年の結果だが、現在、2016年においては、テレビもしくはスマホ、パソコンへも興味が広がっているかもしれない。

保育園から帰宅して家で過ごす時間の多くをテレビ、ビデオ、テレビゲームに費やすことが親との接触時間を減らし、絵本を読む、おもちゃで遊ぶなど実体験を伴った遊びの時間の減少へと繋がり、結果的に幼児に描画発達の遅延といった悪影響を与えているとも考えられよう。戸外遊びなど物を使って遊ぶことは、手を使い、触覚、視覚、聴覚といった五感を働かせることに繋がり、結果的に指先の発達を自ら促し、描画発達を促すことへも繋がっていく。一日のメディア接触時間が4時間以上になれば、遊びを通じた感覚の発達を促す貴重な時間が受動的に映像を見るだけといった時間になってしまい、そこに大きな経験の差ができてしまう。この幼児とメディアとの接触時間も環境条件（物的環境・人的環境）の一部として考えられるが、それは幼児本人と周囲の人々の努力次第で改善の余地があるのではないだろうか。

Ⅲ章で述べた子安らが行った調査の考察において、「ビデオとの接触およびビデオとの接触を含むメディア接触量と描画内容との関連が見られ、接触量が多い子どもの方が少ない子どもよりも描画内容の評定得点が低かった」と述べられているが、最終的には「メディアが直接描画の質に影響するとは言い切れない」と結論付けられている。「ビデオ」と「テレビ」では、その内容及び繰り返し視聴の頻度に差が出てくると考えられるが、今回はテレビ、ビデオ等を含む広義での「メディア」として捉えたい。このような研究結果によれば、過度な幼児のメディア接触量が必ず幼児の描画発達に影響を及ぼすと断定はできないが、幼児のコミュニケーション能力の発

達など様々な視点も含めて、幼児に対して何らかの悪影響を及ぼす可能性があり、幼児の描画発達に対しても同じことが言えると考えられる。

2 幼児のメディア接触量減少のための改善策

これまで幼児の過度なメディア接触が様々な面において、幼児に悪影響を及ぼす可能性があるとして述べてきたが、我々大人は幼児にメディア、つまり視覚情報を与えることが実体験と同等するという錯覚を起こしていないだろうか。そもそもメディアとは、「実際に自分が経験したことではなく、現実の経験に勝るものではない」と考える。シュタイナー教育を実践する共同体、「ひびきの村」ミカエル・カレッジ代表の大村祐子は、テレビについて下記のように述べている。

「自分自身を生きる」ためには、自分自身が世界に出会い、自分自身が世界を感じ、考え、判断しなければなりません。(中略) テレビで放映されるものは、制作した人がその人の目で見、その人の肌で触れ、臭いを嗅ぎ、味わった世界だからです。わたしたちはそれを画像で見ただけです。画像は本物ではありません。(中略) どれほど見てもわたしたち自身の体験にはなり得ないのです。¹⁰

上述したように、テレビの映像は、まるでその場所に自分が行ったかのような錯覚を起こすかもしれないが、それはあくまで実体験ではないのである。そのため、情報として得る分には有効であると考えられるが、それだけに頼ってしまうことは、視覚情報のみに頼る行為であり、推奨できない。

では、具体的には、どのようにしてテレビから幼児を離せばよいのか。片岡は、「テレビによる言葉遅れを予防するための15の方法」として、「1. テレビを消す、2. 一つの番組を見終わったら、必ずスイッチを切る、3. ながらテレビはしない、4. 録画しての繰り返し視聴はしない、5. 市販作品は買わない、6. 子どもと向かい合って遊ぶ、7. 抱っこを惜しまない、8. 一緒に絵本を読む、9. 歌を唄ってあげる、10. 添い寝をしてあげる、11. 家庭でも戸外でも、常に言葉で語りかける、12. ごっこ遊びや見立て遊びに導く、13. 意図的な早期教育は必要ない、14. テレビより実体験を共有する、15. 機嫌がよいお母さん、お父さんである」¹¹といった15項目を挙げている。この15項目のうち何か一つでも実践できるものがあるのではないだろうか。つまり、保育園から帰宅して、幼児をテレビと共に放置するのではなく、抱っこをしたり、絵本を読んだり、幼児と向かい合って対話する時間を必ず設けることが大切なのである。そして、テレビを見せる際は、「時間を決めて見せる」、「テレビを見ながらご飯を食べない」という約束事

も必要である。テレビを観ながら食事をすると、味わって食わず、テレビに集中し過ぎるあまり、よく噛まずに食べることは消化にも悪く、結果的には、一日のうちの貴重な家族との会話時間を奪うことになってしまう。

しかし、現代において、メディアはテレビ、ビデオ、テレビゲームに留まらず、インターネット、ユーチューブといったメディアも含まれる。テレビ番組は興味のないものは見ないため、録画後の繰り返し視聴をやめれば、多少接触時間は減らせるだろう。しかし、自分の興味のあるものだけを繰り返し、継続的に視聴できるのがインターネットの存在である。スマホに子守をさせるなど、母子の接触時間の短縮にもなりかねない。無藤隆は、テレビとの接触について、下記のように述べている。

しかし、だからといって、短い時間でも乳児がテレビと接することがいけないというのではない。応答的なやりとりを大幅に減らすことがあるかどうかの問題なのである。テレビのかかっている部屋に乳児がいても、他に面白いことがあれば、乳児はテレビをあまり見ない。乳児がテレビを長く見ているとすれば、他に面白いものがないからなのである。だから、乳児がテレビのかかっている部屋に多少の時間いても、おもちゃで遊んだり、大人の相手をしたりで過していれば、とくに問題はないと思われる。¹²

つまり、多少の乳児、幼児とメディアとの接触は問題ないが、仮想現実、映像だけの世界にとどまることなく、実体験の伴う興味深い経験をさせることが重要である。そして、そこに幼児の感性を育てるような自然、造形活動、音楽等との接触を幼児のうちから経験させることが重要ではなからうか。例えば幼すぎで理解できなくとも、感覚を伴った経験から、興味を持つこともあるだろう。実体験を大切にし、動物も映像ではなく、動物園に行き、実際に見ることで、そこにある季節の空気感、動物の臭い、声、音、様々な要素が幼児の五感を刺激し育て、幼児と一緒に楽しみながら、大人の五感も刺激するはずである。

3 今後の課題

今回はメディア接触時間と幼児の描画発達との関連性について述べたが、インターネットの普及により、これから益々幼児とメディア接触時間は増加傾向にあると考えられる。その弊害が何なのか、幼児にどのような影響を及ぼすのか、真摯に考えるべきである。最も大切なことは何なのか。幼児に何を身につけさせたいのか、どんな未来を描いてほしいのか。そこには、多くの経験から培った豊かな感性、主体性、想像力、創造力、運動能力等、様々なものが必要であり、それを手助け、援助するのが大人なのである。幼児を取り巻く保護者、保

育者、全ての大人が「ちょうどいい時期にちょうどいい環境(人的環境・物的環境)を与えること」を目的とし、それを保育、育児の核として、心得るべきであろう。

これまで述べてきたように、テレビとの接触には、多くのマイナス面があるが、視覚情報としての理解度の高さ、情報の得やすさ、そこから広がる興味関心などプラス面もない訳ではない。幼児とメディアとの接触を全否定する訳ではない。なぜなら、仕事、家事、育児を行う保護者にとって、幼児がメディアと接触する時間が、貴重な家事等の時間になることもあり得るからである。大切なのは、幼児とメディアの過度な接触を避け、メディア接触時間と人と関わる時間、遊びの時間などとのバランスをとることである。

本研究報告は、既存する研究結果をまとめたものに過ぎないが、幼児の描画発達段階の遅れの原因を裏付けする研究の存在を調査することも本研究報告の目的である。幼児に関する研究は多岐にわたり、調査すべき内容は多分に存在すると考える。そして本研究報告を発端とし、幼児の描画・造形活動について今後も研究を継続していきたい。

註

- 1 郷間英世, 大谷多加志, 大久保純一郎, 2008年, 「現代の子どもの描画発達の遅れについての検討」, 『教育実践総合センター研究紀要(17)』, pp. 67-68, 参照
- 2 花篤實, 岡田愨吾, 2009年, 『新造形表現 理論・実践編』, 三晃書房, pp. 28-34, 参照
- 3 川越奈津子, 池田友美, 武藤葉子, 郷間英世, 2008年, 「5歳保育園児の生活習慣と描画能力」, 『日本小児保健講演集』, p. 316, 参照(表1, 上掲書, p. 316)
- 4 川越奈津子, 池田友美, 武藤葉子, 郷間英世, 上掲書, p. 316
- 5 子安増生, 郷式徹, 2008年, 「4歳児の男女人物画の発達とメディアの影響」, 『日本心理学会第72回大会発表論文集』, p. 1105, 参照(表2, 上掲書, p. 1105)
- 6 子安増生, 郷式徹, 上掲書, p. 1105
- 7 戸矢晃一 編集, 2005年, 『子どもを伸ばす家庭のルール』, (株)パン・クリエイティブ, pp. 34-37, 参照
- 8 無藤隆, 村田光二, 浜野保樹, 1987年, 『テレビと子どもの発達』, 東京大学出版会, pp. 182-183, 参照
- 9 子どものテレビの会(FCT), 1981年, 『テレビと子ども』, 学陽書房, pp. 12-13, 参照
- 10 戸矢晃一 編集, 前掲書, p. 96
- 11 戸矢晃一 編集, 上掲書, pp. 39-41, 参照
- 12 無藤隆, 村田光二, 浜野保樹, 前掲書, p. 37